〜Swing Journal Readers Choice〜
スイングジャーナル【リーダーズチョイス】

Ballad Higgins
バラード・ヒギンズ

Eddie Higgins Trio
エディ・ヒギンズ・トリオ

1. エンジェル・アイズ
Angel Eyes《M. Dennis》(5 : 20)
2. マイ・ファニー・バレンタイン
My Funny Valentine《R. Rodgers》(5 : 38)
3. サムシング・クール
Something Cool《B. Barnes》(4 : 05)
4. ダニー・ボーイ
Danny Boy《Trad》(4 : 41)
5. クリフォードの想い出
I Remember Clifford《B. Golson》(5 : 12)
6. 愛の語らい
Falando De Amor (Speaking Of Love)《A. C. Jobim》(4 : 33)
7. ビューティフル・ラブ
Beautiful Love《V. Young, W. King, E. V. Alstyne》(3 : 22)
8. アイル・ネバー・ビー・ザ・セイム
I'll Never Be The Same《M. Malneck, F. Signorelli》(3 : 53)
9. ディトュア・アヘッド
Detour Ahead《H. Ellis, l. Carter, J. Frigo》(5 : 28)
10. モア・ザン・ユー・ノウ
More Than You Know《V. Youmans》(5 : 11)
11. ベツレヘムの小さな町
O Little Town Of Bethlehem《Trad》(4 : 44)
12. 愛のテーマ
Love Theme From The Invasion Of The Body Snatchers
《D. Zeitlin》(4 : 33)

℗© 2005 Venus Records, Inc. Manufactured by Venus Records, Inc., Tokyo, Japan.

＊

Produced by Tetsuo Hara
Mixed and Mastered by Venus 24bit Hyper Magnum Sound
Front Cover Photo : © The Estate of Jeanloup Sieff / G.I.P. Tokyo.
Designed by Taz.

わが国で絶大な人気を誇っているエディ・ヒギンズが、ジャズ専門誌の『スイングジャーナル』の読者投票によってベスト・コンピレーションを作る。こんな夢の企画が同誌で発表されたのは2005年9月号でのこと。この「エディ・ヒギンズ・スイングジャーナル・リーダース・チョイス」は大きな反響を巻き起こして、これまでに彼がヴィーナス・レコードで残してきた演奏の中から多くのリクエストが寄せられた。

ぼくの手元にある集計によれば、第1位が2135票を集めた「懐かしのストックホルム」、以下に「マイ・ファニー・ヴァレンタイン」（1966票）、「サマータイム」（1682票）、「貴方と夜と音楽と」（1610票）と続く。これらの集計をもとに作られたのが、『バラード・ヒギンズ』と『スタンダード・ヒギンズ』である。

今回の「リーダース・チョイス」には14歳から77歳まで、あらゆる年代のジャズ・ファンから応募ハガキが寄せられた。注目すべきは、ヒギンズの人気作（ヴィーナスからリリースされている彼の作品はどれも高い人気を誇っているが）『懐かしのストックホルム』から多くの曲が選ばれていたことだ。表題曲が1位に選出されたのをはじめ、「貴方と夜と音楽と」、「クリフォードの想い出」、「モア・ザン・ユー・ノウ」の4曲が今回のコンピレーションには収められている。

全体の傾向を見ると、「サマータイム」、「貴方と夜と音楽と」、「マイ・ロマンス」など、ジャズ・ファンに馴染みの深いスタンダード・ナンバー、また「マイ・ファニー・ヴァレンタイン」、「ダニー・ボーイ」、「ビューティフル・ラヴ」などのバラード・ナンバーに人気が集まっている。ヒギンズの妙味は、美しいメロディを繊細なタッチで表現するところだ。それが、これらの曲では最良の形で示されている。

集計結果はヒギンズとヴィーナス・レコードに渡され、両者の協議で上位40曲の中からアルバム用に23曲が選ばれた。さらに発売シーズンを考慮して、クリスマス・ソングの「ベツレヘムの小さな町」が加えられることになった。そして厳選されたこれら24曲が、『スタンダード・ヒギンズ』と『バラード・ヒギンズ』という2枚のアルバムとして発売されることになったのである。

これらの作品からは、類い稀な表現力を身につけたヒギンズのプレイが楽しめる。そればかりでなく、ジャズの歴史に残る数々の名曲にも触れられるところがいい。ヴェテラン・ピアニストのヒギンズが、どうしてこれほど高い人気を獲得したのか。その答えを示しているのがこれら2枚だ。ジャズ・ピアノの楽しさと美しさ、そしてエディ・ヒギンズの魅力。それがここには凝縮されている。

■演奏紹介

1. エンジェル・アイズ

ピアノの弾き語りで知られるマット・デニスの代表作で、1953年に封切られた映画『ジェニファー』のために書かれたナンバー。その映画で、デニスみずからが弾き語りをして有名になった美しいバラードである。ヒギンズは、原曲が持つエキゾチックな味わいを強調してみせた形で存分に歌心を発揮していく。荘厳な響きも併せ持ったタッチが強い印象を与える。

2. マイ・ファニー・ヴァレンタイン

バラード中のバラードとして知られるロレンツ・ハート（作詞）とリチャード・ロジャース（作曲）のチームによる最高傑作。1937年に初演されたブロードウェイ・ミュージカル『ベイブズ・イン・アームズ』のために作曲されたナンバーで、1957年にはフランク・シナトラが主演した映画『夜の豹』で彼が歌って大ヒットを記録した。ヒギンズのヴァージョンはヴァースをソロ・ピアノで弾き、その後にリズムを加えてお馴染みのテーマ・メロディに取り掛かる。オーソドックスなアプローチにもかかわらず、個性的な演奏になっているところが素晴らしい。彼の達者な表現力がこうしたところで威力を発揮する。中盤で「ワーク・ソング」の一節を弾く下りもグッド・センスだ。

3. サムシング・クール

白人女性シンガーとして1950年代に一世を風靡したジューン・クリスティの代表的なレパートリー。器楽奏者でこの曲を取り上げるひとは滅多にいない。ヒギンズはスロー・ボッサのリズムで美しいバラードに仕上げてみせる。ひとつひとつの音を吟味しながら弾いていく姿に、彼の誠実さが窺える。この曲に限ったことではないが、ヒギンズは常に音を大切にしながらピアノを弾く。その最たる例がこの演奏ではないだろうか。

4. ダニー・ボーイ

「ダニー・ボーイ」もあまり多くのひとが取り上げる曲ではない。どちらかと言えば、意表をつくレパートリーだ。ここではアルコ・ベースによるテーマが郷愁を誘う。それに続くヒギンズが何とゴージャスなバラード・プレイを聴かせてくれることか。下手をすればムード・ミュージックになるところを、彼はぎりぎりの線で素晴らしいジャズにしてみせる。アドリブはなくテーマのみの演奏だが、これも立派なジャズ・スピリットに溢れた1曲だ。

5. クリフォードの想い出

1956年6月、天才トランペッターと謳われたクリフォード・ブラウンは交通事故によって、ピアニストのリッチー・パウエル夫妻と共にこの世を去った。わずか26歳の死である。これはその彼を追悼して、盟友でテナー奏者のベニー・ゴルソンが書いた追悼曲。それにしてもヒギンズの演奏は何と穏やかなことか。澄み切った空に1本の真っ直ぐな飛行機雲が浮かんでいるようなイメージだ。鎮魂歌でありながら清々しさも感じさせる。これぞヒギンズならではのパフォーマンスだ。

6. 愛の語らい

ビル・エヴァンスやキース・ジャレットに通ずる叙情的な演奏をヒギンズは得意にしている。パッショネートでありながら、できるだけエモーションを控え目にしているような演奏。そこにこの3者は共通項がある。その最たるものを聴かせてくれるのがこのトラックだ。もっと感情を露わにしてもいいようなところで、反対にヒギンズは抑制した表現を用いて胸のうちを淡々と語ってみせる。それがここでは抜群の効果を発揮する。

7. ビューティフル・ラブ

華麗なタッチもヒギンズが持ち合わせている魅力のひとつだ。日ごろはそれも控え気味にしているが、ソロで演奏されるこのトラックでは、その技法が披露される。装飾音を散りばめたゴージャスなテーマ・パートとストライド奏法的なアプローチでぐいぐいとリズミックに演奏するソロ・パート。これらがヒギンズのピアニストとしての豊かな才能を示している。

8. アイル・ネヴァー・ビー・ザ・セイム

今度はレイジーな雰囲気で演奏されるバラードが登場する。ヒギンズは叙情味に溢れたピアニストとして紹介されることが多い。たしかにその通りである。しかし、叙情味と言ってもワン・パターンではない。穏やかで印象的な表現の中にさまざまな表情が込められている。この多彩なところにヒギンズの豊かな才能が表出されているのではないだろうか。この演奏も叙情味に溢れた1曲だ。しかし、ここには彼独特の気だるいムードも漂っている。そこにこの演奏の素晴らしさが集約されていると言っていい。

9. ディトゥア・アヘッド

瀟洒なタッチを持ち味にしているピアニストと言えば、すぐに思い浮かぶのがハンク・ジョーンズだ。ヒギンズのこのプレイからも同じようなタッチが窺える。ハンク・ジョーンズの白人版的なタッチとでも紹介すればいいだろうか。都会的なセンスに溢れてはいるものの、都会の喧騒を思わせるのではなく、どこまでも洒落た音使いに徹しているところが心憎い。まさにジャズの妙味が溢れ出たプレイである。

10. モア・ザン・ユー・ノウ

ビリー・ローズ＆エドワード・エリスク（作詞）とヴィンセント・ユーマンス（作曲）が音楽を担当して1929年に初演されたミュージカル『グレイト・デイ』からの1曲。“あなたの想像以上に、あなたを深く愛している。あなたが正しくても間違っていても、わたしはいつも一緒。もしあなたが去ったらどんなに悲しいことか。それは、あなたが考えられないほど”と歌われるロマンティックなバラードだ。テーマ・メロディのバックで弾かれるアルコ・ベースが重厚な雰囲気を醸し出す。その後はリズムが入って通常のバラードになるが、このしっとりとした雰囲気が実にいい。

11. ベツレヘムの小さな町

発売時期を考慮して収録されたクリスマス・ナンバー。ヒギンズはクリスマス・アルバムも吹き込んでいる。これはその『クリスマス・ソングス』からの1曲だが、クリスマスという季節限定で楽しむ演奏にしておくのは勿体ないほどの出来映えだ。お馴染みのメロディが、ここでもいつものヒギンズらしくしっとりと、そして荘厳な雰囲気で綴られる。ソウルフルなメロディを品よく演奏してみせるところも彼ならでは。

12. 愛のテーマ

バラードにもいろいろなタイプがある。この曲はミディアム・スローのテンポとスイング感を伴ったリズムで演奏されるが、ヒギンズのアプローチはバラードそのものだ。それは、彼がフレーズを淡々と綴っていることに起因している。こういうプレイもヒギンズだからこそだ。ここではドラムスの代わりにギターを加えたトリオ編成を採用しているが、リズムをつかさどる楽器が抜けたことも、バラードを思わせる内容に繋がった。

[(c)WINGS 05102333：小川隆夫/TAKAO OGAWA]